

最優秀賞

三週間の一人っ子

一色中部小学校六年 野村真司

ぼくは、二人姉弟である。七月二十一日、五歳上の姉が研修旅行のためオーストラリアへ旅立った。姉にとって初めての海外旅行であるし、三週間もの長い旅行であるため、準備するものがたくさんあった。特に荷物の準備に時間がかかった。姉は、一週間前あたりから本格的に荷造りをしていた。かさをへらすために圧縮袋に洋服を入れることにした。袋の中に洋服やタオルなどを入れてジッパーを閉める。そして、端からゆつくりと丸めて空気を抜いていくのだが、これには少しコツがいる。姉が母のやり方を見てまねしているのだが、どうもうまくいかない。

「ぜんぜん空気が抜けないよ。どうやってやるの。」
姉の声がひびいた。ぼくは、しょうがないなと思い、姉が持っていた圧縮袋を手に取り、丸めていった。

「真司、なんでできるの。お姉ちゃんできない。」
「見てればわかるじゃん。端からゆつくりやるんだよ。」

そう言って、もう一回やってみせてあげた。姉は、もう一度挑戦した。コツをつかんだのか、圧縮袋の空気が抜けていた。世話が焼ける姉だな。オーストラリアに行つて大丈夫かなと少し心配になった。

七月二十一日、朝の六時三十分、セントレアに向けて車で出発。父と母に、家族で見送りに行くと言われていたので、しょうがないから見送りに行くことにした。ぼくとしてはやかましい姉がいなくなるからラッキーと思つていた。だって姉がいないとリビングはぼくが一人で占領できるから。いつもテレビの取り合いで、見たいテレビが見れないのだ。だいたい姉は、
「お姉ちゃんはさあ、学校が遠いから帰って来るのが遅いんだよね。真司は、学校が近いし、時間があるんだからたくさんテレビ見たでしょ。お姉ちゃんに代わつてよね。」

と言つてくる。姉が話し出すと、声が大きいからテレビの音が聞こえなくなる。本当にうるさいから、もういいやと思い、テレビのリモコンを渡すのだ。そんな

うるさい姉が今日からいないとは、なんてうれしいことだろうか。セントレアの屋上から、姉の乗った飛行機を見送った。けっこう大きい飛行機で、滑走路を勢いつけて走っていくと、またたく間に飛行機は見えなくなった。今日からぼくの一人っ子生活が始まるのだ。やったあ。

家に帰ってきてても、いつものように姉が出かけているだけのようで、家にいないという実感がなかった。次の日の朝、寝起きの悪い姉がいないので、本当に姉がいないことを実感した。リビングは使いたい放題で、自由に好きなテレビが見られた。姉と言いたいところともなかった。本当に平和だった。姉がいないと、静かだいいと思った。

姉は、オーストラリアを満きつしているのか思ったよりも連絡をしてこなかった。滞在先は決まっていたけれど、会ったこともない人の家で生活するのだから、心配だ。ましてや日本語が通じない。英語を話さなくてはいけない。まあ、そのために行くのだけれど。

そして、出発から数日たったある日の晩、「連絡がないのは、元気にしてる証拠かな。」と祖父が言った。案外うまくやっているのかなと思っ

た。でも、少くらい連絡をよこせばいいのに。おじいちゃんもおばあちゃんもみんな心配しているんだぞと思った。そこで母の携帯を使い、姉に「たまには様子を家族ラインに入れてね。」とメールをした。すると、ホームステイ先の様子を少しずつ連絡してくるようになった。オーストラリア行って二週間ぐらいたったとき、姉から連絡がきた。

「ホストシスターのデビーが、真司と話したいんだって。夜、話すことができる。」

どんなことを話すのかよくわからないけれど、とりあえず「うん。」と、姉にメールをした。夜になると本当に電話がかかってきた。それも、テレビ電話。画面の向こうに、姉とデビーが映っている。

「はじめまして。デビーです。」

「はじめまして。真司です。」

「真司君は何年生ですか。」

「小学六年生です。」

ほかにもいくつか日本語で質問された。デビーは、簡単な日本語なら理解しているようだった。わからない日本語があると、姉が英語で伝えなおしていた。案外やるじゃんと思っ

一人っ子生活も二十一日がたった。明日はいよいよ姉が帰ってくる日だ。明日になるとまたさわがしい日がやってきてしまう。でも静かなリビングにも少しあきてきたから、ちよっとくらいやかましくてもいいかな。姉がテレビを見せてと言ったら、しょうがないから見せてあげようかなと思う。一人っ子もよかったけれど、二人っ子も悪くないかな。